国立極地研究所
大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
南極・北極科学館
Polar Science Museum

たけし、日本へ帰る

たけしのその後

越冬が終わり、ついに帰国のときがきました。たけしは西堀榮三郎越冬隊長・作間敏夫隊員と一緒にセスナ機に乗り、昭和基地から観測船「宗谷」へ戻りました。

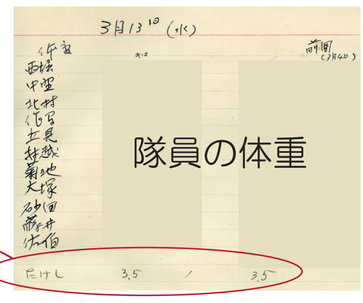
【作間隊員に抱かれて帰還】

【宗谷の磯貝乗組員と再会】

たけしの体重

右の資料は、隊員の体重の記録です。一番下にたけしの体重も記されています。

1 頭約 40kg のカラフト犬と違い、3.5kg と軽いたけしは、重量制限されたセスナ機での帰還も可能だったのです。



たけしの体重

※帰還時の様子について、詳しくは「第 2 次隊の受難と第 3 次隊のタロ・ジロ発見」パネルをご覧ください。

約 1 年ぶりの船内を我が物顔で（？）歩き回るたけし。隊員の手作りの赤い救命胴衣を着て、うたた寝をしたり、散歩をしたり…。自由気ままに過ごす様子は、まるで家の縁側にいるようです。

【宗谷の甲板でくつろぐたけし】

帰国後、たけしは作間隊員に引き取られ、作間家の一員になりました。それから 1 週間ほどは一家にかわいがられて過ごしましたが、ある日突然、たけしは姿を消しました。取材などで忙しくしていた作間隊員の留守中に、家を出て行ってしまったのです。たけしはふたたび、懐かしい南極を目指したのでしょうか。そのゆくえは誰も知りません。

「「タケシ」の魂は、昭和基地に行っているはずですから、ぼくも命が終わるときは「タケシ」に会えますよ。そうしたら、ずっと探して待っていたんだよって言ってやりますよ。」（『こねこのタケシ』より抜粋）

そうお話をされていた作間隊員は、2018 年 12 月 20 日に逝去されました。92 歳でした。作間隊員はたけしに会えたでしょうか？　越冬中のように、また一緒に楽しく過ごしているかもしれませんね。